

平成22年度(2010年度)志賀中学校学校評価書

大項目	中項目	小項目	自己評価		学校関係者評価		今後の学校改善に向けて	
			小項目評価	中項目評価	現況	意見・提言等		
地域に信頼される特色ある学校づくり	学校協力者会議	組織の充実と活性化	A		生徒指導担当を中心に組織の充実と活性化が図られている。学校協力者会議では、授業参観や各種行事、会議等への参加を通して、学校に対して提言を頂き、いろいろな活動で協力を得ている。さらに、よりよい学校づくりのための運営が今後の課題と考えられる。	A	授業参観で家庭の様子が変わる。細かなことが気になりすぎて、その都度、口に出すのは差し出がましいのではないかと考えている。考え方を変えなくては、いけないかと思うが、そういう判断が難しい。生徒を知る事が大事だと思うので、生徒会と話ができると良い。	学校協力者会議は学校と地域と保護者が協同で直接意見を交わしながら学校教育を考える重要な意義を持つ会議である。今後もタイムリーな話題をもとに有意義な会議となるよう計画したい。
		教育活動全般に対する情報提供	A	A				
		構成メンバーによる授業参観	B					
	学校評価	自己評価結果の公表	A		学校評価委員会、学校関係者評価委員会を開催し、学校関係者評価を実施している。自己評価、学校関係者評価を公表している。	A	昨年度、「少人数のメンバーだけで学校を評価していいものか。」という意見があったが、協力者会議のメンバーの他、小学校の代表校長やその他メンバーに含めているので、このまま継続して良い。アンケート結果について、昨年度のデータしか掲載されていないが、過去何年かの分散分析を掲載しないと、統計データとしては不十分ではないか。昨年度が平均値よりも異常な数値であれば、昨年度との比較は意味を持たない。無回答の職員が多数できる質問は構成比を掲載すると紛らわしいのではないかと。	学校評価は全体的には前年度と比較して高評価となっている。その主な要因については校務分掌の見直しや落ち着いた学習環境などが考えられるがと個々に分析し来年度につなげたい。
		学校関係者評価の実施	A	A				
		学校関係者評価結果の公表	A					
	保幼小中連携活動	子どもの校種間交流や教員の出前授業	A		保幼小中連携担当を中心として連携の推進が図られた。今年度、4小学校の要望に応じた出前授業を行うことができた。「ふれあい体験学習」は実施できなかったが3年生で保育園や幼稚園との交流を行った。また、教師間での交流は校区内に限定され、課題が残った。	B	出前授業は小学校にとってありがたいが、連携が取れていると感じている。担当している職員が限られているため、学校の中で連携活動が見えていないのではないかと、もっと、広く職員に見える活動をしていかなければならない。	保幼小中連携では教師同士の連携がまだまだ脆弱である。校区研以外でも校種間で授業を公開し研究する機会が必要ではないか。また、生徒間の交流については授業時数確保の点で教育課程内での交流は難しいが生徒会や児童会を通じた交流や有志による交流なども検討できればと考える。
		校種間の合同研修会	B	B				
		校種間の授業公開	C					
	安全教育・安全管理	危機管理マニュアルの周知徹底	A		危機管理に関しては生徒の避難訓練だけでなく、教職員対象に実際に起こりうる場面を想定しての研修を行っている。登下校の安全ハットルに関しては、地域と連携しながら定期的に実施し、実りあるものになった。	A	地域と連携しながらの安全ハットルは評価できる。今後、安全ハットルの実施箇所について検討を加え、より効果的な取り組みになるよう望まれる。	地域や保護者の協力を得ながら登下校や地域での行事におけるハットルを実施してきた。今後もより効果的な体制を検討しなければならない。また、校内での安全教育・安全管理として火災・地震での避難訓練と不審者対応としての訓練を充実させていきたい。
教員による登下校時安全ハットル		A	A					
家庭や地域の団体、関係機関との連携		A						
健やかな心身の育成	日常の健康観察、子どもの自己健康管理能力向上のための取組	A		熱中症対策について生徒対象の研修会を実施するとともに予防情報を毎日表示し啓発に努めた。また、部活動中のけがが多いことから学校保健委員会で教師をはじめ保護者対象に学習会を開催するなど生徒の健康課題解決に向けて組織的な取り組みをすすめることができた。	A	中学校のいろいろな取り組みは評価できる。給食は生徒の体力増強や保護者の負担等の面で助かっている。	生徒の健康増進のため保健室や保健体育科などで創意工夫しながら課題に対処している。また生徒への啓発のみならず学校保健委員会主催で保護者への研修も行った。今後も引き続き生徒の現状を的確に把握し、状況に応じた対応を目指したい。	
	たくましい心と体を育てる魅力ある体育活動の実践	A	A	保健体育の授業ではトレーニングを重視し、1学期には新体力テスト、身体づくりに取り組んでいる。部活動についても体力と共に人間形成の一環と捉え重視している。食育に関しては生徒会とも連携し、昼の放送で生徒への啓発を行っている。				
	食育の推進	A						
校務運営	教育目標、指導計画等教育課程の編成や実施	B		教育目標は学校評価に基づく年度構想により策定されており、本校の教育課程に沿ったものとなっている。PDCAサイクルを生かした校務運営を図り、実務的な校務分掌組織をつくることができた。教育目標及び生徒の行動目標に関しては生徒への周知が課題である。	B	「校務分掌」という言葉は専門用語(業界用語)ではないだろうか。他にも専門用語を知らずに使っていないか日々検証する必要がある。一般の人にわかる言葉を使用したほうが良い。	学校運営の効率化をすすめてきたが来年度はその2年目にあたる。校務分掌ごとの会議や職員会議の答申をもとにより効果的な運営を目指したい。また、来年度は3年サイクルの中期構想の最終年にあたる。教育目標がどのように生かされているか検証し、次のサイクルにつなげたい。	
	機能的な校務分掌組織とPDCAサイクルを活かした学校運営	B	B					
	保護者負担軽減をめざした予算計画と適切な執行	B						
子育て支援	子育てに対する積極的な支援	B		スクールカウンセラーによる保護者対象の相談や個別懇談会の実施により子育ての支援を行っているが十分とは言えない。しかし、2学期より一部の保護者対象ではあるが「親の会」を開催することができた。今後も支援のあり方やその方策を検討していく必要がある。	B	地区懇談会は大きな地区単位にすると出席者が少なくなってしまう。小さな地区単位にすると出席者は多くなるのではないかと。現状でも出席者が少ないながらも中身のある話ができていると思う。	保護者への通信等での啓発活動がなされているが実際の相談活動の利用は多くはない。今後さらにSCの利用の啓発や情報発信に取り組みなければならない。	
	保護者の悩みを聞く個別相談の実施	B	B					
	保護者の交流や学習の場を意図した参観懇談会	C						
開かれた学校づくり 保護者、地域住民との連携	公開授業や学校開放日の実施と工夫	C		保護者が参加しづらい理由に「参加者が少ない」ことがあがり、本校の教育開放日を学校行事と合わせながら限定した日に設定している。しかし参加者が少ない状況は変わらない。学校支援ボランティアの体制を整っており学校行事や総合的な学習などで支援いただき活動意欲や学習意欲の向上という点で成果が出ている。	B	ひと昔前はPTAに動員をかけるのとたくさんの方が授業参観や行事参加してくださった。今も遠慮せずに言えば協力してもらえるのではないかと。各種通信は生徒経由の配布となり、保護者に文書が渡らないことがある。メール配信機能を活用し、授業参観の案内をすることにより参観を促してはどうか。	行事への保護者の参加は多く、特に志賀中祭では多くの保護者や地域の方が来校され運営にも協力いただいている。学校開放日は今年も多くの参加者に来ていただくことができなかった。学校として真摯に受け止め、体制作りを根本から見直す必要がある。PTAと協力しながら、さらには授業も学校の方向性がわかるものでなければならない。	
	保護者や地域への情報提供	A	B					
	学校教育支援の取組(PTA活動、支援ボランティア)	A						
学力向上に向けた基礎基本の徹底	確かな学力	学力調査の結果の授業への活用	A		基礎基本の定着のため、毎朝10分間の問題演習を年間100回以上実施した。また、定期テスト前や休業中に質問教室や補充教室を実施している。教師個々の授業力向上に向けた取組として「学び合い」をテーマに校内で研修しそれを実践で生かしている。今年度からICT機器が導入され、活用がすすんでいる。	A	中学校が学力向上のため創意工夫していることや研修を通して向上心をもって取り組む姿勢は評価できる。	今年度から始めた朝学習は基礎基本の徹底を目指して23年度も実施する。今年度の反省を生かし、教材の選定や評価の方法について各教科で検討したい。また、質問教室や補充教室など個別の対応について各学年の取り組みを情報交換しながらより生徒に寄り添った内容としたい。
		基礎・基本の定着のための指導方法の工夫と改善	B	A				
		授業における自主的な活動、学びあいの場の提供	A					
	進路指導	発達に応じた進路指導体制の確立	B		3年間を見通した進路学習を計画し、実施している。生徒や保護者への進路相談、情報提供に努めている。3年生における「先輩と語る会」は本校卒業生の協力により特色ある取り組みとなっている。生徒が自分で学習できる進路コーナーの設置は十分とは言えないまでも各学年で進路コーナーを設けている。また、今年度は3年生の進路通信を1、2年生の学年にも掲示し進路情報を流布している。	B	小学校では生き方指導を行っている。中学校の進路指導、キャリア教育が小学校との連携の中で行われるならばより体系的な学習となるであろう。	今年度は従来3年生のみに指導してきた内容について1、2年生の教室にも掲示することにより1、2年生にとってもより進路を考えられる機会とした。設置場所がないため学習活動を可能とする進路コーナーをつくることは難しい。各学年で進路関係の資料を提示するコーナーが設けられているが今後も自分で進路について調べられる機能をもつ環境作りが必要となる。
適確な情報提供と活用		B	B					
進路決定に向けての能力・態度の育成		B						
読書活動	週1回以上の全校一斉読書	A		朝10分間の読書活動を年間70回実施した。図書室の運営については支援ボランティアの協力を得ながら行っているが図書への貸出し状況や授業での活用など生徒の自主的活動の場としては課題がある。図書への貸出しについてICTをフル活用した運営がままなく実現する。音読、群読、暗唱等は言語能力の向上に重要であると言われるが各教科で概ね実施されている。	B	生徒の活用の状況について、どれぐらいの生徒が毎週どれぐらいの本を利用しているのか。図書室の活用を進めてもらいたい。ICT化がスムーズに進んでいることは良いことだ。蔵書の確保のために寄贈を募ってはどうか。	朝の読書活動は一日の学習を落ち着いた受け入れるための準備であったり読解力向上につながったりと大きな効果があるといわれている。来年度も年間70回以上の朝読書の時間を確保したい。実施時期や方法については図書館教育担当が中心となり検討し、効果的な活動としたい。	
	読書環境の整備や地域人材の活用	B	B					
	音読、群読、暗唱等発表の場の設定	B						
豊かな心を育む教育	生徒指導	教育相談やSCの活用など心のケアの体制	B		スクールカウンセラーの活用と共に生徒全員を対象とした教育相談を年間2回実施し心のケアに努めている。また、善行迷惑調査を各学年に2回程度実施し、生徒の実態把握に努めている。生徒指導体制では関係機関との連携は強固なものとなっている。また、啓発のための防犯教室の実施については年間計画に位置づけられている。	A	生徒指導の事例が減り、本来の学校の姿に戻ったように感じる。積極的な生徒指導は評価できる。今後も続けていってほしい。メールを授業中にしている生徒がいると聞くと時代の流れなのか。携帯について本当に必要なのか保護者も含めて考える必要がある。	今年度は生徒指導の事例が減り、比較的落ち着いた学習環境であった。来年度以降もこの状態が持続できるよう生徒の観察をきめ細やかにし迅速な対応で臨みたい。また、より積極的な生徒指導も必要である。今後も防犯教室やいろいろな啓発活動により生徒がもつ前向きな一面や良心を引き出せる取り組みを推進したい。
		子どもの健全育成に向けての取組	A	A				
		生徒指導体制の充実	A					
	道徳教育	道徳実践力を育てる活動の実施	B		一昨年度、道徳の指定校として研鑽してきたが今年度も各学年で教材の開発や授業の公開など工夫しながら道徳の授業を実践している。各学年間での資料の交流が課題である。	B	道徳教育は文科省の指定を受けて積極的な取り組みをされてきた。これからも今までの財産を継承していってほしい。気持ちの良い挨拶をしてくれる生徒も多いが乗車マナー等実践的態度につながる指導がのぞまれる。	新しい教育課程では道徳教育の推進がより強調されているように今後も充実した取り組みを目指したい。特に縦との連携を重視し、資料の交流を積極的に行い、改善を加えることにより質の向上を図りたい。
		道徳の授業研究や資料の整備	B	B				
体験活動	保護者等への道徳の授業公開	A						
	各種体験活動の積極的な実施	A		各学年で体験学習を取り入れている。学習の成果については発表会や新聞などの紙面による発表を行ったが保護者への発表会を実施できなかったのが課題である。	B	実体験が不足していると日々感じている。もっと体験的活動を進めたほうが今のニーズにあっている。	環境学習や踏破遠足など地域での体験活動を多く実施した。今後も様々な活動に取り組みたい。発表に関しては紙面での発表のみならず生徒自身の発表ができる場面をつくる必要がある。	
	活動後の発表会等学習のまとめ	A	B					
特別支援教育	発表会等への保護者等の参加	C						
	個別指導計画の作成	C		特別支援コーディネーターが中心となって、特別支援教育推進委員会を設置し、組織的、計画的に小学校との連携や個への対応を充実させている。しかし、個別指導計画の策定は発展途上である。巡回訪問を活用した研修は行われていないが、校内で特別支援を要する生徒への対応について全体研修を行った。また特別支援教育を中心に据えた人権教育や学校運営を図ることができた。	B	どの学校も特別支援が必要な児童生徒が年々多くなり、難しい課題である。個々に理解する必要があるため、全体的な研修ではなく一人一人の対応の仕方を考える研修をしてはどうか。	組織運営、各校園や関係機関との連携、研修面については特別支援コーディネーターを中心として今後も推進したい。個別指導計画は個々に課題を持った生徒への指導を的確に効果的に行うために今以上の整備が必要である。学級担任をはじめ全教師が意識し充実し努めなければならないと考える。	
	組織的・計画的な特別支援教育体制	B	B					
		巡回訪問等を活用した校園内研修	B					